

## あれから 1 年、仲間から学んだモノは新社会人として大切な心得だった

第 9 期 OB 秋山 賢輔

エッセイを書くにあたり、去年の会誌をふと開いてみた。たった 1 年前なのに、なんだかとても懐かしい想いを抱いた。するするとページをめくっていくと、そこには 1 年前の自分がいた（参照：『OB・OG 会誌』, Vol.V, p.67）。自分で書いておきながら、もっともらしいことを書いているなあ、なんて思ったが、そこに書いてあったことは、この 1 年間、会社の先輩や上司に何度も言われたことだった。

僕は去年の卒業エッセイで、同期から学んだことを書いた。それは、「無知なりの探究心」、「自己犠牲から成る成長」、「楽しさの追求」の 3 点だ。「無知なりの探究心」とは言わば、分からないことはとことん納得できるまで聞くということ。これは新社会人にとって 1 番大切なことだ。会社に入ったら最初は分からないことだらけ。社内でのミーティングや取引先との会話など、もうチンプンカンプン。そこで臆して分からないことをごまかしたり、後回しにしたりしていると、疑問は積み上がるばかりで何も成長しない。それに、分からないことを堂々と聞けるのは新人の特権。新人の間に分からないことは恥ずかしがらずにとことん聞いて、理解することはとても大切なことだ。

「自己犠牲から成る成長」とは言わば、仲間のために時間を割いて何度も教えることで、自分の力として身につくということ。新人は、最初は教えられる立場だったり、覚えることで精一杯だったりして、誰かに何かを説明する機会はなかなかない。しかし、インプットだけでは仕事はなかなか覚えることは出来ないし、ちゃんと理解できたつもりでも、いざ実務の場面になったり、上司に説明してみろと言われてみると、簡単にはできないことが多い。大切なのは、教えてもらったことは、たとえ誰かに説明する機会がないとしても、誰かに説明するつもりで（特にその仕事を全く知らない人に教えることを想定して）自分の言葉で説明できるところまで落としこむことだ。忙しい中でなかなかそういう時間をとれないときもあるが、できるだけ時間を作って、こういうことを意識して考えることは大切なことだ。

「楽しさの追求」とは言わば、現状に満足せず、それが本当に自分にとって楽しいこと、良いことなのか考え抜くということ。会社で務める人にとって、普段の業務を間違いなく適切にこなすことは大切なことだ。しかし、それは誰にもできることで、社会の中の一企業で働く人にとっては、新しい価値を生み出すことこそが一番大切なことだと思う。それはおおげさなことに聞こえるかもしれないが、決しておおげさなことではない。普段の業務の中で感じる小さな課題解決でも、それが業務の効率化につながるのであれば、新しい価値を生み出したことになると思う。ちょっとした不満もそのままにして、現状を維持するだけだと、会社のためにも社会のためにも、なにより自分のためにもならない。何か解決できる課題はないか、あるいは、何か付加価値を生み出せないか、といったことを常に考えながら日々仕事に取り組む姿勢はずっと大切にすべきことだ。